論文の内容の要旨

氏名：五　十　嵐　愛
博士の専攻分野の名称：博士（心理学）
論文題名：慢性統合失調症者におけるぬり絵を用いた縦断的な臨床心理学的検討

本論文はぬり絵を心理アセスメントの一課題として位置づけ，ぬり絵特徴から慢性統合失調症者の状態像と状態の変化を把握しようと試みた実証的な臨床心理学研究である。ぬり絵に着目した理由は，ぬり絵が臨床実践のなかで慢性統合失調症者のリハビリテーション技法として使用されているために，状態の悪い対象者にも取り組み可能であることによる。

第Ⅰ部　序論（第１章から第４章）

統合失調症者の処遇は入院が中心である。入院の長期化は加齢に伴ってさらに高まる (厚生労働省, 2019) ため，日本の精神科医療では慢性統合失調症者の退院促進が大きな課題となっている。いうまでもなく，医療従事者は彼らが退院に至るための有効な治療を提供する必要があり，そのためには対象者の適切な状態像と状態の変化を把握することが必須となる。統合失調症者は経過とともに状態が安定する (e. g. 臺, 2000) とはいえ，非常に不安定な病態像を示す (中井，1976) ことからも，彼らの状態変化を把握することの必要性が指摘できる。しかしながら，統合失調症の生涯過程では一般に経過とともに陰性症状が前景となることによって，慢性統合失調症者は一見するといつも同じ状態で固定しているかのように見えてしまい，診察場面・日常生活の様子からでは状態変化を捉えきれない問題がある (森田, 1989)。以上のことを併せると，慢性統合失調症者の外見上からは捉えきれない状態の変化が把握できる感度を備えた方法があると治療に有益である。陰性症状に付随して生じやすい精神活動量の低下や言語交流の乏しさ，そして認知機能の低下が生じている慢性統合失調症者の状態の変化を把握するための方法としては，簡便なものでありながら，それでいて繰り返しの実施が可能であることが条件となる。

状態像を把握するための方法として，臨床心理学の領域からは心理検査を用いた心理アセスメントが有効性を発揮している。しかし慢性統合失調症者を対象とした場合，標準化された心理検査がもつ手続きの煩雑さ，繰り返しの使用に不向きなものが多いことなどを理由に，標準的な検査を慢性統合失調症者の状態像の把握や状態の変化を把握するために使用することは難しい。そのなかで描画法は上記の条件を満たし，統合失調症者を対象に研究が蓄積されてきた。描画研究の知見を要約すると，統合失調症者の描画は整合性の欠如，運動性の印象の乏しさで特徴づけられる (e. g. 三上，1979a ; 横田，1994)。そして，描画特徴は対象者の精神症状 (e. g. 横田他，1999b)，背景要因 (年齢・罹患期間・知能・病型) が関連することが見出されている (e. g. 森田，1989 ; 須賀，1987)。さらに，描画特徴の継時的変化を追跡することにより，統合失調症者の状態変化の把握のために有用な情報が得られることが報告されている (e. g. 三上，1979b)。

ぬり絵は描画法よりもさらに簡便であるため，慢性統合失調症者に適応的な技法である。ぬり絵の事例研究 (昆田他，1999) では陰性症状の改善に伴ってぬり絵の整合性の印象が改善し，適度な運動性の印象として収まることが報告されている。ここから，ぬり絵はリハビリテーション技法に留まらず，対象者の状態変化を把握するための情報が得られる (心理アセスメントとしての使用) ことが指摘できる。ただ，ぬり絵研究は数が少なく，先行研究ではぬり絵を心理検査に位置づけていないため，標準化された刺激材料が存在せず，ぬり絵の評価方法も検討されていない。

そこで本論文では，臨床実践のなかでぬり絵を慢性統合失調症者の心理アセスメントとして活用することを目指し，次の目的を検討した。(1)「二枚ぬり絵法」を作成し，信頼性 (評定者間信頼性・再検査信頼性・α係数) を検討すること，(2)「二枚ぬり絵法」の部分的特徴・全体的特徴とオックスフォード大学版 Brief Psychiatric Rating Scale (以下，BPRS) による精神症状 (全体的精神症状・陽性症状・陰性症状・下位症状) との関連を明らかにし，(3) ぬり絵の部分的特徴・全体的特徴と背景要因 (年齢・罹患期間・コース立方体組み合わせテスト (以

下, コース検査) の IQ) との関連を検討すること, (4) 対象者の状態の変化を把握するため, 二枚ぬり絵法の全体的特徴の継時的変化を明らかにすること, (5) 二枚ぬり絵法と臨床実践のなかで使用されている心理検査を組み合わせて実施し, 各課題に表現される特徴の差異を検討することにより, ぬり絵課題の特長を考察することである。

第Ⅱ部　慢性統合失調症者におけるぬり絵特徴の理解（第 5 章から第 8 章）

第Ⅱ部では本論文の 5 つの目的を検討するために，慢性状態にある統合失調症者 (Schizophrenia ; 以下, S 群) を対象に縦断的調査を実施した。

第 5 章では，目的 (1) 「二枚ぬり絵法」の作成を行った (研究 1)。7 枚の刺激図条件と 3 種類の彩色道具条件 (クレヨン・クーピー・色鉛筆) を設定し，条件間の質的特徴の出現数の差を比較した。その結果，本論文の目的を検討するためには，性質の異なる 2 枚の刺激図 (幾何図形・子犬の絵柄) に色鉛筆で色を塗る課題を使用することがふさわしいことが明らかとなり，この課題を「二枚ぬり絵法」と命名した。

第 6 章では，二枚ぬり絵法の部分的特徴に着目し，S 群と健常者 (Normal ; 以下，N 群) を対象として目的 (1) 信頼性，(2), (3) について検討した (研究 2)。評定者間信頼性は十分な値が示され，再検査信頼性の結果からは，個人内の表現が安定している項目と変化しやすい項目があることが認められた。S 群・N 群の部分的特徴の出現数の比較結果より，S 群は刺激図全体を配慮して部分要素に色をつけられないことが明らかとなり，これは全体的特徴に繋がる部分的特徴であることが仮定された。そして，N 群は年齢が一部の部分的特徴を予測するのに対し，S 群の年齢・罹患期間は部分的特徴から独立し，コース検査の IQ が一部の部分的特徴を予測することが示された。さらに，一部の部分的特徴は BPRS の評価による全体的精神症状得点・陽性症状得点・陰性症状得点・下位症状得点を予測することが認められた。以上の結果から，二枚ぬり絵法は S 群の状態の把握を目的とした臨床的利用の可能性が示唆された。

第 7 章では二枚ぬり絵法の全体的特徴に着目し，目的 (1) 信頼性，(2), (3) について検討した (研究 3)。評定者間信頼性と再検査信頼性の値は十分であった。因子分析の結果，二枚ぬり絵法の全体的特徴を示す因子は「不整合性」,「運動性」であることが示され，これら下位尺度得点の α 係数は高い値を得た。続いて，2 (群)×2 (刺激図) の分散分析の結果，N 群は刺激図間で不整合性の印象に差がないのに対し，S 群は幾何図形よりも子犬の絵柄において不整合性の印象が高く，運動性の印象は両群に差がないことが示された。ここから，S 群は子犬の絵柄において不整合性の印象が高まり，運動性の印象は両群に差のない指標であることが認められた。そして，部分的特徴と共通して N 群では年齢と一部の下位尺度得点が関連するのに対し，S 群の年齢・罹患期間は全体的特徴から独立し，各下位尺度得点とコース検査の IQ が関連することが示された。さらに，子犬の絵柄における不整合性尺度得点は BPRS の評価による全体的精神症状得点・陽性症状得点を予測し，運動性尺度得点は陰性症状得点を予測することが認められた。ここから，二枚ぬり絵法を継時的に使用することにより，S 群の状態の改善・悪化を跡づけられることが仮定された。

第 8 章では，目的 (1) 信頼性，(4) を検討した (研究 4)。評定者間信頼性と各下位尺度得点の α 係数の値は十分であった。2 刺激図における各下位尺度得点の個人の継時的変化の推移を検討すると，転帰研究 (宮他，1984) で見出されている安定群・固定群・変動群のうち，変動群に相当すると思われる対象者が多く存在していることが見出された。この結果は中井 (1976) を支持する。そして，全体的特徴が増悪する事例 A も出現し，A の診療記録を照合したところ，全体的特徴の変化は A が対象喪失を経験した後に生じていることが明らかにされた。

第Ⅲ部　慢性統合失調症者の個人的特徴の理解

――テストバッテリーを用いた事例検討――(第 9 章)

第 9 章では，目的 (5) を検討した (研究 5)。三事例を対象に，二枚ぬり絵法・彩色樹木画・ロールシャッハ法を組み合わせて実施した結果，各課題に表現される特徴は個人内において共通する側面が認められた。その一方，第 II 部の対象者の精神症状得点と比べると，やや重度に位置する事例であっても，二枚ぬり絵法では N 群の水準で彩色可能である人も認められた。この結果は二枚ぬり絵法が簡便であるため，慢性統合失調症者であっても健康な側面を表現できる余裕が残されていることによると考えられる。そして，

彩色樹木画では樹木画を描けず，ロールシャッハ法においては状態把握のための有益な情報を得ることが困難と判断される事例であっても，二枚ぬり絵法は実施可能で，この事例の精神症状得点とぬり絵特徴の対応は，第 II 部の結果を支持していた。

総合考察（第 10 章）

第 10 章では，本論文の検討によって明らかになった結果に基づき，二枚ぬり絵法の臨床的利用に向けた示唆を論じた。

本研究結果から，ぬり絵はリハビリテーション課題としての利用のみならず，精神症状の程度を大まかに把握することができ，慢性状態にある統合失調症者を対象とした心理アセスメントの一課題として使用可能であることが示唆された。慢性統合失調症者の治療のなかに二枚ぬり絵法を差し込むことにより，外見上からは把握することが難しい状態の変化を見逃すことなく捉えることが可能となり，彼らの有効な治療に本課題は寄与することとなろう。